

EAS技術標準公開

各機器の検知範囲の測定法統一で、高信頼性確保へ

日本万引防止システム協会

日本万引防止システムとで、機器の信頼性向上協会(東京都新宿区、山にに加え、万一の際に不検村秀彦会長、TEL03・3355・2322、以下J.E.A.S.)は、万引犯罪

対策などで更なる普及拡大が期待されるE.A.S.機器の検知範囲の測定法を統一する試験規格を策定。これまで機器ごとに異なっていた検知範囲の測定方法が統一されるこ

とで、機器の信頼性向上導入されている。だが、E.A.S.機器ごとに検知範囲の測定法が異なっていたり、設置環境や測定時と異なるタグの利用などによって、システム運用にあたって想定していた

近年刑法犯認知件数が減少基調にある中、課題となっているのが高齢層への拡がりが見られる方引犯罪の現状。業種を問わず、店舗でも万引犯罪防止の為にE.A.S.機器が

た場合、場合によっては店内にタグの不検知エリアが生じる可能性もある。そのためE.A.S.機器に対するユーザーの不安を払拭する検知範囲規定が求められていた。

こうした課題に対し、J.E.A.S.技術基準委員会ではE.A.S.機器の信頼性向上、利用者の有益性確保を目的にE.A.S.各

機種共通を対象とする検知範囲確認試験規格を策定。検知範囲試験では、検知範囲確認にあたって周囲温度は15度から35度、湿度25%から85%といった具体的数値に加え、評価に影響を及ぼさない環境での試験実施、タグの通過条件などを規定。

適正な検知範囲の基本条件として、不検知ポイントがないこととした。運用に際して、複数の種類のタグ使用時には、タグ全種類の試験実施が望ましいとする一方、検知率が最も低いタグを用いた試験のみでの検知範囲確定を妨げないこととした。また、検知率が高いタグの検知範囲で、検知率が低性能のタグを用いる場合には、想定される不検知ポイントと検知率をユーザーに明示することを求めた。

今回の規格策定により、ユーザーのE.A.S.選定基準の明確化及び、信頼性向上に繋がること期待される。